研　究　成　果　報　告　書

令和２年２月５日

１．所属・職・氏名　等

文学部　比較文化学科　准教授　水野光朗

２．研究課題（テーマ）名

研究課題（テーマ）名：学力の三要素に立脚したグローバル人材養成を目指した授業改善
該当する研究領域：大学の授業改善に関する研究領域

３．研究期間

平成３１年４月１日から令和２年３月３１日

４．利用した研究費の種類及び金額

利用した研究費の種類：重点領域研究費
金額：１９１０８７円

５．研究の概要

現在、学力の三要素（（１）知識・技能の確実な習得、（２）（１）を基にした思考力、判断力、表現力、（３）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）に基づく大学教育改革の重要性が強く求められている。また、グローバル人材の養成も社会的に極めて強く要請されている。

本研究は、「英語で授業を行うこと」を直接的な目的とするものではなく、学力の三要素に立脚したグローバル人材養成を目的とする本学における授業改善の試みである。

年度毎の研究計画は、次のとおりである。

平成３１年度・令和元年度

申請者が今まで行ってきた教育実践に基づき、学生が高校までに培った力を更に向上・発展させ、社会に送り出すため、学力の三要素を涵養することを念頭に、グローバル人材の養成を目的として、一層の授業改善を図る。具体的には、（１）担当講義科目およびゼミをすべて英語で行う。（２）履修者が多い講義科目では、知識・技能の確実な習得を目指す。（３）ゼミでは、学生主体の授業を展開し、思考力、判断力、表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を習得させる。ダイバーシティ（多様性）を重視する観点から、可能であれば交換留学生もゼミに受け入れる。また、障がいを持つ学生も積極的に受け入れる。障がいを持つ学生の受け入れについては、発達障がいのある学生を受け入れた実績がある。

教育実践によって得られた知見は、PDCA サイクルに則りその都度、授業にフィードバックし、持続的かつ継続的に授業を改善する。

なお、講義科目については、レジュメ等の配布物を、加筆、修正した上で、随時、本学機関リポジトリで公開する。リポジトリで公開された資料を閲覧すれば、講義の概要が把握でき、本学の学生のみならず本学で学ぶことを志す交換留学生が、履修する授業科目を主体的に選択する一助とする。レジュメ等の配布物を加筆、修正した上で、本学機関リポジトリで公開する教育実践は、既に行っている。

さらに、本教育実践によって得られた研究成果を本学に提言としてとりまとめる。

６．研究成果等

研究成果を次の二つに分けることができる。

１）学力の三要素の涵養

高大接続改革にともなって、学力の三要素の重要性が説かれるようになった。学力の三要素とは、１）個別の知識・技能、２）思考力・判断力・表現力等、３）学びに向かう力・人間性等である。

教育実践

まず、ゼミにおいて、学生主体の授業を展開し、思考力、判断力、表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を習得させることを目標とした。

具体的には、キャリアを形成する態度と自己実現する態度を涵養するために、5 月 27 日にキャリア支援センターの協力を得て、3 年ゼミの一環として就活勉強会を開催した。3 年ゼミ生に、就職活動を始めるにあたって疑問に感じていること、不安に感じていることを具体的に箇条書きのメモの形で提出させ、ゼミ生から提出されたメモをキャリア支援センターのキャリア相談専門員に送付し、このメモに基づきながら、就職活動を始めるにあたっての心構えについて、キャリア相談専門員とゼミ生との意見交換を行った。キャリア支援センターから学生への一方的な情報提供（知識・技能の受け渡し）ではなく、意見交換を通じて、キャリアを形成する態度と自己実現する態度を学生が主体的に会得することを意図した。同時に、自らが抱いている不安や疑問は、学生みなが共通して感じていることに気付かせることも意図した。これは、協働性や豊かな心の涵養につながっている。

ゼミでは、ゼミ担当教員が自分自身の専門的な知識を学生に伝達するのではなく、学生が自ら自主的かつ主体的に問題意識を持ち、自らの学びを深めていくことを意図して、学生が輪読したい文献を持ち寄って、輪読を行った。通常、3 年ゼミでは最初にゼミ担当教員が自らの専門領域に近い文献を輪読文献として指定することが多い。この方法では、結局のところゼミ担当教員が自らの専門領域に学生の関心を引き寄せることになり、知識・技能の受け渡しに終始してしまう。ゼミ生が輪読を希望する文献として提案したものの中には、ゼミ担当教員が専門とする分野からかけ離れているものも多く、「ゼミ担当教員と学生が輪読を通じて一緒に学んでいく」やり方をとった。技能・知識の受け渡しではなく、「ゼミ担当教員はあらゆる学術・学問分野に通暁していることなどありえず、神羅万象すべてにわたって知っているわけでもないこと」を学生に気付かせること、そして、「ゼミ担当教員が学んでいく学びの姿・学びの姿勢を実際に見せることによって、学問に対する謹厳な態度を学生に見せる」ことを意図した。学生が学びの際に用いるツールとしては、スマートフォンやパソコ

ンが主流であることがわかったため、重点領域研究費を用いてパソコンを購入し、本学附属図書館レファレンス担当の協力も得ながら、パソコンを用いた資料調査の方法を学生に会得させるよう心掛けた。

教育実践の成果

こうした教育実践の結果、3年ゼミ生の大半が夏休み前から就職活動をはじめた。と同時に、本学における学びの集大成としての卒業論文の作成も就職活動と同時並行的に行い、3年生が終わるころまでに、卒業論文のテーマを決定している。輪読文献を主体的に選択させることによって、卒業論文の研究テーマの設定が容易になった。

すなわち、学力の三要素を重視し、ゼミの進め方を改善した結果、学生の「思考力・判断力・表現力」と「学びに向かう力・人間性等」を涵養することが可能となった。

今後の課題

今回行った教育実践は、履修者が比較的少人数であるゼミがゆえに行うことができた。履修者が多い講義科目では、知識・技能の受け渡しに終始することが多いように思われる。成績評価の方法として、レポートを提出させたり、講義の感想をコメントシート等に記載させて提出を求める場合であっても、結局は、履修者が教員から受け止めた知識・技能を「覚えているか」を問うものが大半である。講義科目において、思考力・判断力・表現力等や、学びに向かう力・人間性等をいかにして涵養するかが今後の課題となろう。

さらに、ユーチューブなどのインターネットの動画サイトには、国際連合や国際刑事裁判所が学士課程の学生を対象に作成した動画を使った教材が多数公開されている。これらの動画を教室でプロジェクタを使って投影してよいのかどうか、投影するにあたって何か手続きが必要なのではないかといった著作権上の問題があることも本教育実績の結果、明らかになった。この著作権をめぐる問題にも今後取り組んでいきたい。

２）グローバル人材の養成

教育実践

本重点領域研究の担当者は、講義（アジア文化社会論、国際関係論）とゼミをすべて英語で行っている。最大の眼目は、「英語の授業」ではなく、「英語で授業」である。

「英語で授業」の意図としては、まず第一に、交換留学生の受け入れ態勢の整備である。現在、本学の交換留学制度は、大きな課題に直面している。それは、本学の学生の学力不足ではなく、本学の施設・設備が貧弱であるためでもなく、本学に交換留学を希望する学士課程の学生が極めて少ないことにある。本学に交換留学しても日本語の授業の履修が必修であるうえ、英語で履修できる専門科目が皆無に近い状況では、本学に交換留学を希望する学生を確保することは難しいと言わざるを得ない。こうした状況を打破する一助とするべくゼミを含むすべての担当科目を英語で行った。

「英語で授業」の第二の目的は、本学で学ぶ交換留学生と本学の日本人学生が、ともに一つの教室で机を並べ、一緒に授業を履修することによって、日本人学生が交換留学の疑似的な体験をすることである。疑似的な体験は、交換留学への動機づけとなる。

教育実践の成果

こうした教育実践の結果、本重点領域研究の担当者のゼミ生から、英語圏の大学に交換留学した学生、夏休みを利用し適切な手続きを経てアメリカのテーマパークで就業体験をした学生、アメリカでワーキングホリデーの体験をした学生が出ている。英語圏の大学に交換留学した学生は、当初、本学の国際交流に必ずしも積極的とは言えなかったが、交換留学を通じて、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」を涵養し、帰国後はオープンキャンパスで本学の交換留学の魅力を受験生に積極的にアピールし、自主的に北欧からの交換留学生とも交流を深めるなど、本学の国際交流に積極的に貢献している。

今後の課題

本学の国際交流、とりわけ交換留学の充実を目的として既に国際交流会館が建設されている。建物（インフラ）が整備されても、交換留学生の受け入れる教学上の措置（コンテンツ、特に、日本人学生と交換留学生が同じ教室で机を並べて学修する授業の実施）を充実させなければ、恰も「仏作って魂入れず」である。

7．研究の実績（論文・発表　等）

Mizuno Mitsuaki, `Culture and Society in Asia', 2019
（アジア文化社会論で配布したレジュメと資料を加筆、修正し、都留文科大学学術機関リポジトリ TRAIL を通じて公表した。http://trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/952）

水野光朗著、「領域に関する基礎的概念の整理－領土・領海・領空から宇宙空間、サイバー空間、電磁波領域まで－」、2019 年
（比較文化総合の本研究担当者担当分の講義で配布したレジュメと資料を加筆、修正し、都留文科大学学術機関リポジトリ TRAIL を通じて公表した。
http://trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/936　）

Mizuno Mitsuaki, `International Relations', 2020
（国際関係論で配布したレジュメと資料を加筆、修正し、都留文科大学学術機関リポジトリ TRAIL を通じて公表を申請中）